



六 気合術

私は若い時気合術をやり、それで人の病気を治したことがあるのです。人間は息を吸う時は弱く、息を吐く時は強いのです。水をかぶるとき、息を吸いながらかぶると冷たく感じるので、息を吐きながらかぶると冷たく感じないのです。「エイツ！」といって気合をかけるときも同じです。息を吸いながら気合をかけても力が入らないのですが、息を吐きながら気合をかける力がかもるのです。

あるとき、郷里島原の小浜に隈部儀太郎叔父さんを訪ねて行った時のことでした。一人の村の青年が叔父さんを訪ねて来て何か病氣のことを話しているのです。それで私が気合術をやっているので私にかけさせていただけませんかと叔父さんに言いますと、叔父さんが「かけてごらん」といわれたので、ようしと思つてかけてやったのです。そしてその青年は帰って行ったのです。私はそれで治ったのかどうかわからなかったのですが、その翌日、その青年がまたやつて来て「お金はいくらあげたらよいですか」というので初めて私の気合で病氣が治ったことを知ったのでした。どんな病氣だったか忘れてしまいましたが、とにかく治ったのです。それから私の中学校の校長先生の中村安太郎先生のご長男が、お腹をこわされたというのを気合をかけて治してあげたり、また私の懇意にしていた裁判所勤務（後弁護士になられた）の岩本健一郎さんの奥さんの胃けいれんも治してあげたことがあります。どうして治るのかわからないですが、人には皆自然治癒力があり、それに治してあげたいという私の真心が加わって、一層強くなつて病氣がよ